
サモンナイト～ロード・オブ・ナイトメア～

悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サモンナイト～ロード・オブ・ナイトメア～

【著者名】

悠

【あらすじ】

ここは靈界サプレスのどこか

二人の魔術師は突如召喚され姿を消した。

向かった先はリインバウム…聖王都。

物語はここから始まる。

筆者2つの作品です。

魔界よつ出でる者へ e-mail おねがい（前書き）

筆者にとって2作目です。まだまだ不十分な点は多々ありますので
ご教授宜しくお願ひします。

魔界より出でる者へ episode

「」は靈界・サプレスのどこか。そこで一人の魔が対峙していた。一人は地に膝を着き、肩で息をしていた。良く見てみると全身に傷を負っている様子だ。

またもう一人は息切れはしているものの、大きな傷は目立たずもつ一人のモノに比べると余裕の表情を浮かべている。

「俺様の勝ち…だな？バルレル…いや、狂嵐の魔公子よ！」

「くっ、俺が負けただと…？」

地に膝をついている魔はバルレル。「狂嵐の魔公子」と呼ばれるほど強大な力を持ち、周りの魔からは恐れられている大魔だ。

もう一人のモノは…

「今日は俺の負けにしといてやるが…次は俺様が勝つからな！わかつたか、ユウキ！」

「いいぜ、今度はもっと楽しませてくれよ！」

俺の名前はユウキ。まあ、若そうに見えもするが立派な古参の魔だ。グングンと力をつけてきた『狂嵐の魔公子』とはこいつがガキの頃からの付き合いだからなあ。ずっと張り合ってたし、最高のライバルにして親友つてところかな。ライバルつても勝負して負け

たことはないけどな。

「おー、コウキ。何をへらへらしてやがる。」

「あ？お前との勝負もたのしいなーっとなあ」

バルレルはちつと舌打ちをして横に転がつた。既に受けた傷は治癒を開始し始めてこる。

「けつ、俺にとつては疲れるがな。ただ、俺様とまともにやりあえる奴はお前ぐらいなもんだけだな。」

そう、二人は相手に飢えていたのだ。お互いが強力であるが故に…。

「じつかし、お前さんもどんどん力をつけてくるな。お兄さんもう、負けちゃ いそうだよ。」

「けつ。何いつてやがる。そこそこの余力を残していやがるくせによお。」

「あつ、ばれてた？ ほら、そこは経験とか歳の功つてね。」

「ヒヒッ。そうだよなあ？ コウキはおつさんだもんなあ。」

ぐつ、確かに結構生きてるが… おつさんはないだろ？ よー。

そうやって一人で勝負の後の心地よい空気を感じていふといひで…俺達の周りの空気が歪んでいくのを感じた。

「おい！バルレル！ これは、まさかっ！？」

「ああ、わかつてらあー！」いつあ…召還だあー？」

おお、バルレルが段々と召還陣に飲み込まれていっている。こんな大悪魔を召還するだなんて…大層な力を持つてんだなと思っていたら、バルレルの野郎。俺の腕を掴みやがった。じへ、じいつ！もしかして俺まで巻き込むつもりかよつ！？

「つづ！お前何引っ張つて！」

「けつ、てめえも道連れだよばあーっか！」

おまああああ！…つと声をあげていく俺の声は響かず…この靈界サプレスから一人の悪魔が姿を消した。

出でい／ who are you? (前書き)

お久しぶりです。相変わらず短いですが、宜しくお願ひします。

出でい、who are you?~

トリス SHIDE

「古き英知の術と我が声によつて今ここに召還の門を開かん。我が魔力に応えて異界より来たれ。新たなる誓約の名の下にトリスが命じる呼びかけに応えよ。異界のものよ!~」

シユウウウ…ズガーン!

魔力がサモナイト石に絡まり…魔力の波動がその場を支配し…爆発の中心点には一人の悪魔がいた。

「・・・・・」

「(うまく…え?一人…?しかも子ども!?)」

「ふははは…低級な悪魔を呼び出したようだな。しかも二人とは。能力も低そうだ。」

召喚した二人の護衛獣をみて、フィリップ師範は鼻を鳴らしてそう言われた。うつ、確かに見た目はそうだけども…。

「…オイ、ニンゲン」

目の前の田つきが悪く、羽の生えた少年がこっちを睨みながら何か言いたそうであった。

「はいはい、何かしらボク

「ふははは！お前ボクっていわれてるぞ！ってなんじゃこりやああ！－俺様の超美しい尻尾と羽があー？あつ、牙はあつた。でも、なんか視界も低い感じがするし！？」

「つむさこで、コウキ。オイーンゲン。よくもこの俺を呼び出しあがつたな。高くつくぜこの借りはよお…」

「（あらあら、厄介な子を呼んじゃったかしら？）

片方は羽が生えてる男の子…もつ片方は…あれ？人間かしら…？

「おい！おい！バルレル！俺様の、俺様の…」

ユウキって呼ばれた子はなんだか泣いているみたい。バルレルって呼ばれた子は邪魔くさそうにその子みてるけど…

「さて、いつしたお前の下僕は召還された。それでは今から戦闘による試験を行つ！」

フリップ師範は大きそつな御腹を揺らして私に向けてそういった。

「ええ？そんな事聞いてませんよ。」

「お前と戦うのはこの者どもだ」

「いいつ…聞いてないわね。

「いいぜ、俺は今メチャむかついてるんだ。八つ当たりをさせても

「ひつせん？」

「お？お？やんの？バトル？バトル？つか武器ねーじゃんー素手か？素手で戦えってか！？」

二人の悪魔君はやる気満々。ちょっとユウキって子のテンションが高い気もするけども。一人は壁にかけてあった獲物を持ち始めた。バルレルは槍をユウキは片手剣を2本持つ。

「オイ、ニンゲン。手を出すなよ！？ユウキ、どちらが多く狩れるか勝負だ！」

私を残して二人の悪魔君達は駆け出し始めた。

バルレルの槍は鋭く、ダークジエルを軽々と貫いた。また、ユウキの一振りの剣は十字の弧線を描き、ダークジエルは一瞬にして4つに分解された。私も彼らに負けずと混じってダークジエルと戦った。数分後には私達以外には何も存在していなかった。

「ちいっ。ハツ当たりにもなりやしないぜ！あ―――、イラつく！」

「まあ、俺達の手にかかりやこんな奴ら余裕だつてさ。つか、この剣振りづらいなあ。刀はないのか！？」

「（血氣盛んな子達ねえ……）」

その後、フリップ師範に認められ、私は青の派閥の一員と認められた。外に出るとネスが私を待つてくれたのか待機していた。声に出すと、そんな事はないといつてきただ。その後、ラウル師範に召

還獣の事についていわれるまで、私は彼らの事を忘れてしまった。

「あんた達お疲れ様。それにしても見かけによらず結構つよいわねえ？」

「あんな雑魚共にやられる俺様達じゃないわなあ。俺の血膾の羽と尻尾が無くなつてるけど…」

「ユウキは黙つてやがれ！つか、しつこいぞーおいニーンゲン。何主人面してやがる…とつと俺達を解放しやがれ！」

「むー、いつてくれるわねえ。」

「誓約されてやがるから仕方なく命令だけは聞いてやがるが…俺はお前と仲良くするつもりなんてないからな！覚えとけっ！」

「おいおい、そんな邪険にすんなつて。ごめんなあ、トリスちゃん。こいつ短気だからさあ。まあ、照れ隠しみたいなもんだと思つて聞いてあげてよ！ガハハハハ！」

「一タウルサインだよユウキはー」

「（ここにひら仲いいのねえ。）

ここにひらの会話見るとたのしいわねえ。と思つてたらノックの音が聞こえた。ネスがフリップ師範が呼んでる事を伝えに来てくれた。私への御用達は…各地を転々と回り、青の派閥の召還師としてふさわしい行動をする事。期限は無く、目標もなし。あはは、これは追放同然だわね。ラウル師範はなんとか食いついてくれているけど…

これ以上迷惑をかけられない。私はそれを受け入れ、旅支度をし始めた。

旅立ち～～ going my way!～（前書き）

こちらでもお久しぶりです。生きてます。あけおめです！
ネギまの方に比べるとかなり更新頻度は遅いですが、頑張つて最後
まで書いていきたいです。

旅立ち～ going my way!～

いつて。朝起きたら俺様の屋敷のベッドじやなかつた。そういうえば昨日バルレルに巻き込まれて召還されちまつたんだっけ。俺様の隣でグースカ寝てるバルレルを見ているとイラツと来たので鳩尾目掛け腕を振り下ろしてやつた。ぐえっ！という力エルが潰されたような音が聞こえたが無視した。悪魔の怒りはあつそろしいんだからね！

それにもしても、俺様達のような能力の高い悪魔を呼び出すとは…あのトリスつて子もすげえ力をもつてんのかな。まあ、誓約のせいで俺達超弱体化してるけどね。自慢の尻尾とか羽も無くなってるし…。隣で氣絶しているバルレルを放つておいて朝日を浴びているとリスちゃんが入つて來た。

「あれ、ゴウキは起きてたんだ。バルレルは…なんか口から泡吹いてるけど？」

「さてねえ。どこかでぶつけたんじゃないかなあ？ケケケ」

「まあ、いいわ。さて、あんたらも用意しなさい。そろそろ出発よ！」

どうやら、「この嬢ちゃん。仲間から良く思われてないらしい。あの太ったおっさんから心地イイ気配がふんふんしてたからなあ。人間つて奴は尊敬できるぜ。あんなどす黒い感情を平氣で持つてゐんだからなあ。

「向よ、向一ヤーヤしてんのよ~。」

トリスちゃんが怪訝そうな顔で「ひちを見ていた。まあ、護衛の為に呼ばれたんだし…しっかり守つてやるうとしますかねえ。

「いや、なんでもないんよ。んじゃ、コイツ起こしてからいくから先にこつてよ。」

「ふう~ん。まあ、わかつたわ。早くしてね~?」

そういうとトリスちゃんは去つていった。さて、バルレルの奴を起こすとしまじょうかね。

「ハリハリ…おこ、コウキ!…めぐよくもせりやがったな!..」

隣でブツクサ怒っているバルレルを無視してトリスちゃんの横にいる男 ネスティ の話を聞く。どうやらこの街の案内をしている様子。ん、あっちの方にいい場所が…。

「なあ、トリスちゃん。向いの方にもこつてみよーや。」

「え?別にいいけど…。ネス、あっちの方には何があるの?..」

「ああ、あっちの方は…」

ネスティ
眼鏡は歩きながら話してくれてこる。ほう、貴族街とな。隣のバルレルは不機嫌だった顔を直し、この付近に集まる邪気に大層ご満

足していろよつだ。俺も、心地よに空気を感じつゝ「ヤーヤーヤしてしまつ。

「何よあんた達。そんなニヤニヤして。

「ハリハリ所だな。」

「へえ、あんた達もこいつこいつ屋敷に住みたいの？」

「ソレには邪気が集まつてゐるぜ。ヒヒ、人間のソレコト所は尊敬できるぜ。」

「はあ……ほり、もつこくわよ。」

バルレルがもうちょいとソレコトセカリ・ト文句をあげるがトリスちゃんはさつわと先にソレにしてしまつ。全く、悪魔心のわからないご主人だ事。

「さて、それじゃあ。そろそろ出発しようとしたよ。」

眼鏡ネスティがトリスちゃんにソレ聞いてゐる。そんなもん、今までのトリスちゃんの傾向を見てたら…。

「え? ネスが考えてくれてるんじゃないの?」

そらきた。流石は我らが「主人。期待を裏切らないぜ。

「君は馬鹿か! ? なんで僕が考えなければいけないんだ。これは君の使命なんだ。あくまで僕は監視役として着いていくだけだぞ? 当然、全ての決定権は君にあるんだ。もつとも、余りにも無茶な事な

「北?…ビーナスガーデンに行こうか。」

「んー。田的地區…とつあえず北にでも行きましょーか。」

「北?…ビーナスガーデンに行こうか。」

「え、えーっと…」

トリスちゃん、明らかに適当に答えるだら…。隣にいるバルレルなんて欠伸して聞いてやがる。一応俺らにも関係ある事なんだぞ?

「はあ。その様子だとどうせ何も考へてないのだろう?全く、それぐらいは事前に調べておくものだ。とりあえず南だ。ファンへ向かうぞ。君についていったらビーナスガーデンに連れていかれるかわかったものじゃないな…。」

全くもって眼鏡の^{ネズメイ}いう通りだが…それはそれでおもしろいこと毎づ。やはり生きてる限り楽しまないといけない。俺ら悪魔だしな。この子についてけば楽しくなりそうだな。

町を出て街道を歩く俺たち。俺とトリスちゃんは辺りをきょろきょろしながら歩く。へえ~人間界つてのはこんなに自然に溢れてるのかつ!やはり人間界は…

「お前たち、余りキヨロキヨロするんじゃない。まるで田舎者だぞ?」

眼鏡^{ネズメイ}が俺たちを注意していく。しゃーねえじやん。人間界なんて滅多にこられないんだしよー。バルレルも俺の行動を見て「悪魔の品格が下がるからじつとじるー」と叱咤してくる。なんだよ、そんなに

殺氣を撒き散らすなよー。

「あつ、あそこに向かあるわよー。」

トリスちゃんが指を示した方向になにやら建物が…休憩所か?

「ああ、あれは旅行者が休憩するための場所だな。ただ、ああいう所には…」

「おー、二ングン。もうあの二ングンは行っちゃったぞ。」

「おー、おー。トリス!」

後ろから何か聞こえるが、既にトリスちゃんは建物に向けて走っている。俺はそれについていつてるが…いいねえ。イイ感じの空気が流れている。

「変ね。誰もいない…まあいや。ねえ、コウキ。こじりで一休みつてのはどうかな?」

トリスちゃんが能天気な表情で俺を見つめている。流石トリスちゃん。こじりを包む気配なんて眼中に無しか!カハハ、そりゃいい!

「おー、いいと思つぞ。バルレルも喜ぶだろ?。」

そして俺たちに追いついてきた眼鏡ネズミが一言。

「ふう、まだ旅の始まりだとここのまじめだがんばる。」

「うー。」

トリスちゃんは図星を突かれて引いてしまつ。かわいいやつちゃんあ。

「後な、一ついい事を教えてやろつ。こいつら休憩所は旅人にとっては欠かせない場所である。だが…」

「同時にもつとも油断しやすい場所でもあるつてな?」

俺がそういう途端に周囲を取り巻く気配 殺氣 どもが姿を現した。トリスちゃんは急な事で頭がついていってない様子。

「ケケツ、こんな殺氣にもきづかねーとは、呆れてモノも言えないぜ。」

「キミ以外はどうも、この展開を予想していたようだ。つたく、好戦的な奴らだ。いいか、トリス。旅にはこういうのも付き物だとよく覚えておけ。」

「ビ、ビリするのよー?」

「そんなの決まってるだろ?」

「こいつらをぶちのめすだけだヨー!」

俺とバルレルは一目散に野盗へと突っ込んでいった。

「へへつ、なんだガキ共?痛い目にあいたくなかったらさつせと…

ぐわああ！

手始めに先頭にいたニンゲンから切り刻む。攻撃してくる事を予想していなかつたのか抵抗もなく一瞬にして男は気絶した。

「てつてめえ！やりやがつたな！」

ニンゲン共は殺氣をこぢらに向けて襲いかかつてきただが…遅すぎるので！

キイン！と音を立て俺は持つていた片手剣で襲い来る短剣を弾き飛ばした。俺に腕ごと弾かれた男のがら空きになつた胸へと掌底を打ち込む。ニンゲンの身体は俺らの腕力に軽く吹き飛ばされ、他のニンゲンの所へ勢いよく激突した。突然の衝撃に体勢を崩した他のニンゲンの所へ一瞬にして近づき回し蹴りを打ち込み更に吹き飛ばす。一人は更に他の奴を巻き込み、また一人は木に激突したりと。各々が吹き飛ばされた先にて気を失っているのを確認してから次の獲物を探す。

「やるじゃねえか、ユウキ！俺も負けちやいられねえなあ！」

バルレルはスピードを生かし、敵をかく乱させる。敵がバルレルの姿を見失つたが最後、奴の持つてる槍によつて深々と胸に穴を空けられその命は絶たれていつた。

打、打、打！ 貫、貫、貫！

20を越す程にいた野盗だが、瞬く内にその数を減らしていくつた。

「ひつ、ひい！化け物！」

逃げる野盗。逃すほどやせしい俺たちじやあない。

「残念ながら、逃がすわけにゃあ……」「ケケツ、それやと…」

「お前たち、もひやめろー！」

あ？なんだ、あの眼鏡ネスペティ…俺たちを止めよつてか？いい度胸だ。

「ユウキ、バルレル止めなセーー！」

ググウーー！これは…制約かつ！？むぐう…恨むぞ、トリスちゃん。

「そんな田で睨まないの。もうこいでしょう？」こつらは役人に渡しましょつ。

むうーー！暴れ足りないぞ…。いつにうーインゲンを見てるとトライトライするんだよなー。アイツはなんのために…

旅立ち～going my way!～（後書き）

久しぶりすぎてストーリーを忘れてしました

思い出しながら書いていきます（笑）

謝罪

いつも私の小説を読んでくださっている皆様、ありがとうございます。

この度、大スランプに陥ってしまい… 小説の続きがかけなくなりました。

メインであるネギま！の世界でやりたい放題は遅くなってしまいますが、続けていく気ではありますが、こちらのサモンナイトの方は打ち切りとさせていただきます。（サモンナイトのソフトが行方不明になったというのもあります）

こちらの方は更新が余りできていなかつたので御覧になつてている方は少ないとは思いますが、いつしてもアップをさせていただいた以上、いつしてもお詫びをさせてもらいました。

誠に身勝手な理由でござりますが、ご理解の方をよろしくお願いします。

乞うましては、「書けるのであれば」でござりますが別の作品を投稿しようかと思つています。

ある程度書いてみないとわからぬのですがね^ ^；

…書く前にメインを書かないとな…。o^o

今、メインも書き中なので…頑張りますのでまた応援よろしくお願ひしますー！ではー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0676p/>

サモンナイト～ロード・オブ・ナイトメア～

2011年9月27日23時21分発行